

高粱の文化収蔵品

今月号は、成羽美術館に収蔵されている児島虎次郎「和服を着たベルギーの少女」(明治42(1909)年)を紹介し、

【問い合わせ】 成羽美術館 (☎044556)

【和服を着たベルギーの少女】



児島虎次郎(1881~1929)は、大原孫三郎の支援を受け、明治41年からの約5年間、油絵の本場ヨーロッパで修養を積み、最初は多くの日本人が留学していたフランスに滞在しましたが明治42年秋頃からは、落ち着いて勉強できる場所としてベルギーのゲントという街の美術学校へ入学しました。今回紹介する【和服を着たベルギーの少女】は、ゲントで勉強し始めた時期に描かれた意欲作です。

「和服を着た西洋の女性像」は、虎次郎が留学の当初から描きたいと思っていたテーマだったようで、パリから東京の友人に頼んで、振袖一式をわざわざ送らせていました。日

本女性の最高位の盛装を西洋のモデルに着せて描く事、それは東洋的なものがヨーロッパでどのように絵になつてゆくの、という画家としての探求だったのかもしれない。本作は長襦袢を着た女性像ですが、この2年後の明治44年には振袖姿の【和服を着たベルギーの少女】(大原美術館蔵)がフランスのサロン・ド・ラ・ソシエテ・ナショナル・デ・ボザールに入選し、パリ画壇へのデビューを果たしています。

虎次郎の留学していた20世紀初頭のヨーロッパでは、パリは「芸術の都」として多くの芸術家を魅了してました。ベルギーで研鑽を積んでいた虎次郎もパリのサロンで認められる事を目指し、何通りもの【和服を着たベルギーの少女】を描いています。

本作品は現在開催中の特別展「マリー・ローランサンとその時代展」(巴里に魅せられた画家たち)に出品されています。虎次郎だけでなくパリで学び才能を開花させた各国の画家達の作品も是非この機会にご覧ください。(会期:12月25日まで)

シリーズ

歴史まちづくりセミナー ⑧

歴史まちづくり計画から「吹屋銅山の歴史①」について紹介します。

【問い合わせ】 歴史まちづくり課 (☎0202020202)

①吹屋銅山の起源

吹屋銅山の起源には諸説あります。一説に大同2(807)年があり、『延喜式』(927年一応完成。967年施行)からは、備中国は鉄とともに銅の産出でも実績があったことが分かります。ただし、この平安時代の銅山が吹屋かどうかは定かではありません。

他説では、『吉岡銅山相続次第書上』(大塚家文書・文化元(1804)年)によるところでは、吹屋銅山の起源は応永年間(1394~1427)頃と記述されています。

②村稼ぎの時代

吹屋銅山は天文年間(1532~1554)に出雲国の戦国大名尼子氏の所領となり、尼子氏の部将吉田六郎兼久が黄金山に砦を築いて銅山を支配しました。江戸時代中期の『御山鑑』には当時の大深千軒の繁



銅山は、戦国時代から近世初期にかけて大いに稼動しました。

栄が記されています。

しかし、吹屋銅山は山陰と山陽をつなぐ戦略拠点でもあったため、安芸の戦国大名毛利氏が勢力を伸ばしてきました。永禄・元亀・天正(1558~1591)の時代には、毛利氏の直轄銅山となり、その家臣の備中松山城代・天野五郎右衛門が銅山役所を設けて吹屋銅山を支配しました。

その後、備中松山藩の小堀遠州が吹屋銅山を支配下におきましたが、吹屋の大塚伊兵衛を請負人とし、「村稼ぎ」(地元資本による銅山経営)の形で経営しました。

が、領主の交替にもかかわらず、その請負人は一貫して地元の大塚家であり、地元農民を主とする銅山稼であったことが、このころの吹屋銅山経営の特徴です。

③吉岡銅山と領外豪商の参入

山崎家治が備中国成羽藩主だった元和4(1618)年からの20年間は、吹屋銅山は成羽藩の支配下におかれました。成羽藩時代の特徴は、近世264年を通して唯一の私領時代であり、それまでの「村稼ぎ」的方法を改め、領内・領外の豪商を請負人としたことでした。

山崎家治が天草に移された後は、正保年間(1644~1647)のときの備中倉敷代官・彦坂平九郎が、大坂や堺の有力な銅山師に請け負わせて、行き詰った銅山経営を打開しようしました。結局長続きせず、一時閉山もしましたが、寛文10(670)年から天和年間(1681~1683)までの10数年間は銅が湧き出るように産出され、連上金も3倍以上に跳ね上がったといわれています。

このころ、彦坂代官の提唱で、当時金の産出でにぎわっていた

野菜のユズ風味

ホウレン草にはカロチン、鉄分が多く含まれています。カロチンは体内でビタミンAに変わりますが、皮膚粘膜を丈夫にし、免疫力を高め、風邪の予防に有効です。ホウレン草の鉄分はたんぱく質やビタミンCとともに取ることで吸収が良くなるので、ホウレン草、卵、ユズの組み合わせはとても効果的です。

今月のレシピ提供は

市栄養改善協議会連合会川面支部
山川 眞智子 さん



1人分の栄養価 エネルギー 87kcal、たんぱく質 4.4g、脂質 3.6g



<材料> (4人分)

- ホウレン草200g
- ニンジン150g
- モヤシ120g
- 干しシイタケ12g
- しょうゆ 20cc
- 砂糖 8g
- みりん 8g
- 干しシイタケの戻し汁50cc
- 卵 30g
- 油 適量
- ユズ果汁10cc

<作り方>

- ①ホウレン草は熱湯でさっとゆで、水気を絞り2cmの長さに切る。
- ②ニンジンは皮をむき2cmの長さの千切りにし、ゆでて水気を切っておく。
- ③モヤシは食べやすく切り、熱湯でさっとゆで、水気を切っておく。
- ④水で戻したシイタケを千切りにし、④で煮る。
- ⑤錦糸卵を作る。
- ⑥④に火が通ったら、①②③を加えて混ぜる。
- ⑦食べる直前にユズ果汁を加えてあえる。
- ⑧⑦を器に盛り付け⑤の錦糸卵を飾る。

※このレシピは、行政チャンネル、市ホームページでも紹介します。

④泉屋による発展

幕府による政治も安定してきたことから、吹屋銅山では採掘方法は長期的、持続的な方法に変えられました。

そこで幕府が銅山の請負人として白羽の矢を立てたのが、泉屋吉左衛門、後の住友の祖です。彼は坑内に湧出する水の排水路さえ開発すれば新山同然に採算がとれることに気づき、安定した合理的な長期経営を目指しました。元禄4(1691)年2

月、泉屋は全長200間余(約360m)の排水大坑道の掘削に成功し、西国一の産出量を誇る銅山になりました。吹屋銅山の歴史の中では、戦国時代末期から江戸時代初期の第1のピークに続いて、第2のピークとなります。

しかし、泉屋はそのころ発見した四国の別子銅山に乗りかえ、吹屋銅山の採掘権を返上しました。幕府からの慰留もありましたが、結局、正徳3(1713)年に稼業を打ち切りました。(次号に続く)